



# 病気になれば 鳴り物入りで追い払う

今から230年前の「皿山代官旧記覚書」に、次のような記録があります。

「現在（明和7年・1770）有田郷に医師がおらず、急病人が出たら、治療も間に合わない。これではいけないので内外山の庄屋とも相談し、葉札の銀高（謝礼）も決めて、家毎に分担してもらい良い医者をも有田皿山に居てもらおうようにすべきである」と。このように申し合わせたものの、皿山に医師がなかなか居ついてもらえませんでした。

当時、有田皿山の入口に関所があったのですが、長崎往來の医師が入り込んで来ては、高い家葉（自家製の葉のことか）や妙葉を売っていました。

それから60年経った文政12年（1829）、ようやく鹿島より「元甫」という医師が有田に住み込むようになりました。元甫医師は実に篤実な方で、困った人にも施薬をして、親切の限りを尽くされたそうです。ところが間もなく、元甫の兄、四郎兵衛が鹿島に戻ってくるようにと皿山代官に申し出ます。

一方、皿山には祈祷（きとう）によって病気を直すのも流行っていました。靈感の強い御言伝宜者（ミコトモチ）によって神意を伝えるのですが、それが鉦や太鼓などの鳴り物入りで病気を追い払うというものですから、街の中は大変賑やかなものとなりました。

皿山代官は、鳴り物入りの場合は代官所に届けてからするようにと注意をしております。

また、「願掛け」「願成就」も鳴り物入りで、願成就には酒宴となり、喧嘩がつきもので陶磁器作りに支障をきたす程であったそうです。

降（くだ）って大正11年、有田町で「松浦陶時報」が創刊されています。この新聞の中に、当時の小林歯科医が「虫歯予防の1円は治療の100円に勝（まさ）るとして、金の入れ歯を全国5千の歯医者が1カ月平均10匁使うとして1年間で6百貫となり、その価格は3百万円の巨額となる。これは佐渡金山の産出量では足らず国家的重大問題である。このようなことから歯の手入れを普段から充分にやりなさい」と説いておられます。

また、その頃トラホームが流行っていました。それを予防するために鴨緑江節で次の予防宣伝歌がありました。「トラホーム家内に出れば／はや気を付けよ／手拭い・ハンカチあゝ風呂の中／ヨイショ／油断する間にヨイコリヤ／皆うつるよ／移るりゃ、また迷惑身の要心チョイ・チョイ」

大正11年の「松浦陶時報」の医院の広告は次の通り。①久米医院（幸平）②小林歯科（幸平）③正司医院（岩谷川内）④船津歯科（赤絵町金毘羅神社下）⑤山崎医院（本幸平）⑥宮崎歯科（上幸平）で、大正14年になって桑古場に渋川医院（のち有田医院）、坪井歯科（稗古場）、福田医院（中の原）があります。

（久富桃太郎）



有田町史「通史編」によれば、文政12年（1829）有田郷の村々で流行病が発生した時、皿山で子供踊りを奉納すると立願して大きな災厄を免れた。

それで八幡宮の祭礼の時に子供踊りを奉納したが、藩が許可しなかった。これを聞いた皿山では、願成就の子供踊りを奉納しなければ、どのような神罰を受けるかもしれないという不安にかられ、仕事も手につかない状態になったと書いてあります。



# 皿 山 夏

No. 54

有田町歴史民俗資料館・館報



# シリーズ ザ・陶器市 陶器市物語

## その2

### ～100回の歩み～

前回の「皿山」で100回目を迎える陶器市の誕生のころを紹介しました。有田を取り巻く環境が、明治のころと平成の現在とよく似ていることに気づかれたでしょうか。「歴史に学べ」という言葉がありますが、裏を返せば人間は結局同じことを繰り返してしまう、つまり「歴史を学んではいけない」といえるのかもしれませんが。しかし、どの時代においても、質の高い焼き物を作ろう、有田焼を売り込もう、有田の町をより良くしようということに努力した人々がいたことを、もう一度思い返してください。

## 100年それとも100回？

99回目の有田陶器市と九州山口陶磁展は盛況のうちに幕を閉じました。来年の100回に向けて、皆さんはどんな秘策を練っていらっしゃるのでしょうか。

現在の「陶器市」は、明治29年の陶磁器品評会に端を発していることは前回述べた通りです。でも西暦でいえば明治29年は1896年、100年だとすれば来年の2003年では計算が合いません。なぜでしょうか。

それは2003年までの間に、7年間陶器市が開催されなかった年があったからです。主に第二次世界大戦の時代の6年ですが、それ以前の明治37年にも当時日露戦争の勃発で中止となっています。平和ということが、いかに有田焼と関係しているかということもいえるのでしょう。また、現在は新緑の季節に開催されますが、第1回の明治29年は3月ですし、3回目の明治31年は6月、同36年は10月と一定していませんでした。それが5月に定着してきたのは大正11年以降のようです。

会場は明治44年大樽に「有田物産陳列館」という建物ができるまでは、本幸平の桂雲寺の本堂を借りて行われていました。明治36年の「西松浦郡陶磁器同業組合 日誌」によると、会場10日分の借家料として40円が支出されていますが、この時の経費は次の通りです。

- ・設備費 (九州各新聞広告料、備品陳列棚など) 340円



大樽にあった有田物産陳列館（現在 有田商工会議所の所）

- ・儀式費 (褒賞授与式費、記念盃300個など) 220円
- ・雑給 (審査長などの実費弁償、書記給など) 110円

総額は670円となっています。当時の白米の小売価格が10キロで1円19銭（東京における標準価格米）でした。仮に現在の標準価格が10キロ3,600円として約3,600倍ですので、2,412,000円の経費がかかっていたこととなります。ちなみに、当時の巡査の月俸は9～12円ほどでした。

## 大問題となった天草陶土の使用

現在、有田焼の生産に天草陶土は欠かせないものとなっていますが、明治34年の第6回西松浦郡陶磁器品評会では「他郡の生地に錦付けをなせし」出品者がいたというので大問題になりました。このため、出品者は1円の違約金を科せられました。残念ながらどのような製品が出品されたかはわかりません。ところが、翌35年の品評会では「組織を改造し、規模を拡張して優品を陳列」したとあり、さらには「今回は決してそのようなことはせず（つまり天草陶土の使用を禁止せず）に、各種の原料を使用した出品が多かった」とあります。そして、これこそは有田の門戸開放だと評されています。

この年の来賓には県知事代理として井上書記官、納富介次郎佐賀県工業学校長、松村八次郎らがいました。納富や松村らは海外の陶磁器生産地を視察し、海外の事情にも詳しい人々でしたから、有田の新しい時代を予測したのかもしれませんが。

このように、伝統と新しい分野が交錯する品評会・陶器市の歴史は、有田陶磁史の一面も持っているといえるのではないのでしょうか。 (尾崎 葉子)



## 「写真で残すふるさと有田」の作品

このほど、昨年度から実施している「写真で残すふるさと有田」の作品展を開催しました。これは、急速に変化しつつある有田の風景を写真記録で残そうという趣旨で行っているものです。

今年度の応募作品は134点でした。昨年に引き続きの方や、今年初めてという方もいらっしゃいましたが、審査の結果下記の方々が受賞されました。

### 受賞者

- ・有田町長賞 秀 竹男 様 (黒牟田)  
作品名 「茂正窯」



- ・有田町教育長賞 前田 弘子様 (戸杓)  
作品名 「有田ダムから撮影した大神宮」



- ・有田町文化協会賞 田中フミ子様 (大樽)  
作品名 「登り窯の見える場所」



- ・特別賞 野田 源秋様 (戸矢)  
作品名 「古木場ダム遠景」
- ・入賞 田中 直良様 (大樽)  
岩永 利男様 (丸尾)

これらの写真は当館で永久保存します。

## 寄贈資料の紹介

このほど、本幸平・岸川タヨさんより、故岸川鼓蟲子（本名博輝）さんの蔵書を寄贈していただきました。総数は1200点余で、その中には各地の同人の句集や、雑誌ホトトギスなどがあります。

平成11年12月7日、89歳で死去された岸川鼓蟲子さんは、町内の句会での指導はもとよりホトトギス同人として、佐賀県俳句協会の会長も務めていました。岸川さんは二十歳過ぎから俳句を始め、定型を守り写生に徹した格調高い句風で知られていました。句集「窯」のほかに、「例句付窯用語解説集」などの編著書があります。

また、俳句を通じた文化貢献で佐賀県芸術文化功労賞、地方文化振興功労者として文部大臣賞を受賞されています。

有田は江戸時代に建てられた「芭蕉句碑」もあるように、俳句の盛んな土地柄でもありました。有田ホトトギス会は昭和9年に長崎高等商業学校を卒業した岸川さんが、郷土史家の池田忠一さん（泉山）や、赤絵町の法元寺住職中野子老さんらとでつくり、九州俳壇の重鎮河野静雲氏の指導を受けながら充実を図っていきました。会員の句集「窯」のほか、平成2年には全国的にも珍しい焼き物にちなんだ句の歳時記を発行しました。

これらの資料は書籍が主ですが、中には陶器市協賛行事として開催された俳句大会の冊子もあります。昭和11年から陶器市協賛の俳句大会が開催されていますが、昭和28年の陶器市俳句大会の折りに出版したガリ版刷りの句集は大変貴重なものです。

現在も、俳句愛好家の方はたくさんいらっしゃいます。遺族の岸川タヨさんは「故人が収集した資料が散逸してしまうよりは、町の方で一括して保存をして活用してもらえたら」という思いを持たれ、知人の松尾生野さんを通じて当館への寄贈となりました。

当館では早急にこれらの資料を整理し、多くの町民の方に利用していただきたいと考えております。



# お知らせ

## ①古文書初心者教室開催

5月より初めて古文書に触れてみようという方を対象に、現在公民館主催の古文書教室受講生が講師となつての初心者教室を開催しています。

古文書というとなかなかとつきにくいものですが、一度足を踏み入るとその面白さは病み付きになります。江戸時代の有田を知る手掛かりがきっと見つかると思います。

## ②ウォーキング開催

6月5日(水)午後1時20分より、江戸時代の地図を持って皿山を歩く会を公民館と共催で行います。今まで見過ごしていた有田のよさを再発見するチャンスです。

## ③「伊万里市史」発刊

伊万里市ではこのほど「伊万里市史 陶磁器編 古伊万里」が発刊されました。執筆は古文書教室の講師でもある前山博氏と九州陶磁文化館副館長の大橋康二氏です。江戸時代、有田で焼かれた陶磁器がどのように日本各地あるいは世界に流通したかということが、詳細に記されています。

すでに、流通関係では「有田町史 商業編」がありますが、さらにあらたな資料なども採り入れられていて、有田の陶磁史を解明する貴重な資料です。

## ④歴史探訪ツアーの開催

伊万里・北松地区広域市町村圏組合では、毎年8月に親子で学ぶ歴史講座を開催しています。昨年は大河ドラマにちなんで長崎県鷹島町を中心に行われましたが、今年は平戸地方を中心に「教会と千灯籠祭りを訪ねて」をテーマに開催予定です。対象は小中学生の親子となっています。

また、10月は一般の方を対象とした歴史探訪ツアーで、泉山の陶石を生み出した松浦地方の大地を訪ねるコースと、平戸神楽の2コースが開催予定です。

いずれも、詳しいお問い合わせは当館(☎43-2678)までお願いします。



外務省の外郭団体「日韓文化交流基金」が「日韓学術文化青少年交流事業」の一環として、韓国の

蔚山大学・啓明大学・清州産業情報大学、日本の東京大学・一橋大学・上智大学などの大学生(外交官を目指す人)93名が2回に分けて有田を訪問されました。

後日、次の礼状が届きました。「今回、日韓の青年が共に、東京・京都・奈良・有田町を訪問する中で、貴町にて韓国と日本との深い交流史に触れることができたのが、大変貴重な経験でした。韓国の参加者は朝鮮半島の磁器製作の技術が、日本で伝統として根付いていることに深い感銘を受けておりました。また、有田町歴史民俗資料館で、日韓の学生が真剣な表情で有田の歴史についての説明に耳を傾けていた姿が印象的でした。」(日韓文化交流基金より)

とくに泉山磁石場案内の後、陶山神社で宮田宮司により、ここに李参平が神様として祀られていること、有田で一番高い場所に頌徳碑が建てられていることに、韓国の学生が感涙していました。また、第2回目の訪問団の折りには李参平の子孫である金ヶ江省平さんにも同席していただいたのですが、みんな揃っての記念撮影など日韓友好に役立ったようです。

(久富桃太郎)



2月20日、日韓両国の大学生が来館

## 季刊『皿山』

通巻54号(平成14年6月1日)  
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1  
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185